

駿建

2015 Jan. vol.42 No.4

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College

THE HARRY AND CAROL
DJANOGLY GALLERY

Special Feature

インターネット の使い方





Special Feature

インターネット の使い方

インターネット上で閲覧できるWWW (World Wide Web) が誕生して25年が過ぎました。もはや生活と切り離すことができなくなったインターネットは、皆さんにとっては、どのような存在でしょうか？ 日々、どのような使い方をしているのでしょうか？

ひとくちにインターネットと言っても、その使い方ひとつで、広がる世界が変わってきます。

あるときは、情報を得るための情報源や利用するサービスとして、またあるときは、あなた自身が表現し発信する自己表現やコミュニケーションツールとして……

一方で、建築のさまざまな分野においても、仕事の進め方や研究方法が、インターネットの登場によって、さまざまな変化をもたらしてきました。

どうやら「インターネットの使い方」は、多方面から、自分自身の人生をより豊かにできるかということに、大きく関わってくるようです。

今回の特集では、各分野の先生方に登場していただき、それぞれの分野からみたインターネットの使い方について、語っていただきました。

何かひとつでもかまいません。改めてインターネットを使うことで、新しい世界を覗いてみませんか？ そこには、あなたをより良い未来へつなげる入口があるかもしれません。

photo : Garry Knight

インターネットの使い方



構造力学もネットで学べる！ 学内サイトや新聞記事検索も有効に活用。

text=田嶋和樹 准教授

私が大学に入学した1995年には、既にインターネットは存在していましたが、それほど便利な存在ではなかった気がします。WEBサイトはほとんど文字情報ばかりで、画像データが多少見られる程度でした。その後、PCの性能とインターネットの通信速度が飛躍的に向上すると、インターネットを利用した建築構造教育のためのWEBサイトが登場するようになりました。例えば、名古屋工業大学の市之瀬先生が公開している**構造力学入門ソフトウェア** (<http://kitten.ace.nitech.ac.jp/ichilab/mech>) が有名です。「ホームページで学ぶ構造力学」と題した図書も出版されており、図書とWEBを連携させた建築構造教育の

先駆けと言えるかもしれません。実は、私も**構造力学教育のためのソフトウェアをWEB上で公開**しています(左上:<http://rc.arch.cst.nihon-u.ac.jp/FA2D.html>)。簡単なマウス操作だけでN、M、Q図や変形図を描画できるソフトです。このソフトの使い方は、構造力学の教科書の下巻に掲載されています。構造力学が苦手な学生のみならず、是非使ってください。また、掲示板だけが唯一の情報源だった私の学生時代とは違い、現在は**CSTポータル**(右上:<https://newportal.cst.nihon-u.ac.jp>)に学内情報が集約されています。学生時代、休講連絡に気づかず、ずっと教室で先生を待ち続けたことを思い出すと、とてもうらやましいです。また、

CSTポータルは授業でも活用されています。私が担当する構造力学の授業では、**講義ノートや演習問題とその解答を毎回アップロード**しており、学生はそれらをダウンロードして、自宅などで復習することが可能です。授業アンケートでも好評を得ていますので、学生の成績もきっと向上している……と思います。近年、最も利便性が向上したのは、**図書館のWEBサイト** (<http://www.lib.cst.nihon-u.ac.jp>) だと思います。特に、学内利用が前提ですが、オンラインデータベースや電子ジャーナルの充実には驚きます。学生の皆さんには、「**日経BP記事検索サービス**」(<http://bizboard.nikkeibp.co.jp/kijiken>)がお勧めです。なんと、日経ア



先生の オススメ サイト

ーキテクチュアのバックナンバーを無料で読むことができます。他にも、新聞記事の全文データベース「聞蔵II」(朝日新聞) (左下: <https://database.asahi.com/library2>) や「ヨミダス歴史館」(読売新聞) (右下: <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan>) も無料で利用できます。

就職活動に関しても、学内WEBサイトが充実してきました。大学本部が運営するNU就職ナビ (<https://recruit.nihon-u.ac.jp>) はもちろんのこと、建築学科独自に整備した就職情報サイトにも注目です。建築学科の就職情報サイトでは、建築学科の重要就職情報を提供していますので、学生の皆さんは必ずチェックして、積極的に活用してください。 関

ぶるくんのじこしょうかい

<http://www.sharaku.nuac.nagoya-u.ac.jp/laboFT/bururu>



以前、理工学部で講演を行ってくださった名古屋大学の福和先生が開発された振動実験教材のWEBサイトです。減災への取り組み例として、内閣府のWEBサイトでも紹介されるほど有名な教材で、ダウンロードも可能。一度訪問して試してみたいはいかがでしょうか。

日本大学理工学部図書館

<http://www.lib.cst.nihon-u.ac.jp>



データベースや電子ジャーナルの利用はもちろん、教員からのおすすめの本の紹介やさまざまな図書館イベントの告知があります。図書館イベントのひとつである学生選書ツアーでは、書店を訪問し、図書館に配架したい図書を自分で選ぶことができます。

建築学科就職情報

https://shukatsu.arch.cst.nihon-u.ac.jp/data.php?c=nu_login



就職活動を開始する3年生やM1のために建築学科で整備した就職情報サイト。建築学科独自の重要就職情報も提供されます。このサイトを見て、日大理工建築の伝統と歴史を感じながら、社会で活躍する先輩方に感謝しつつ、皆さんも自分の夢を実現するための切符を手に入れてください!

インターネットに関する名言 (1)

「インターネットの世界は狩猟民族的なところがある。ある日突然、パソコン1台を肩にさげてきた若者が、業界を席卷することもあるのです。だから、私としては常にフィールドを眺めてチャンスの芽を探しておく。チャンスを見つけたら、素早くとびかかって事業にする。」

(孫正義・実業家)

インターネットの使い方



ネットを最大限活用することが、リアルな世界の解像度をより高める！

text=佐藤慎也 准教授

学生の頃はインターネットなんてなかったもので(1994年:大学院修了、1995年:Windows95発表)、建築の情報を手に入れるためには本や雑誌に頼るしかなかった。ついでに個人的な思い出を書くと、1996年12月16日、水戸芸術館にて坂本龍一とメディアアーティスト岩井俊雄によるライブが行われ、インターネットで生中継された(<http://park.org/Japan/1216>)。既に大学の助手となっていたから、当時としては最新のネット環境を持つ研究室で、その中継を見た。インターネットはすごいものかもしれない、と思った最初のときだった。

今では建築家の作品集なんか買わなくても、建築家自らがWEBサイトで自分の

作品を紹介している。レム・コールハース率いるOMA(左上:<http://www.oma.eu>)は、最新プロジェクトをリアルタイムで載せているのももちろんのこと、レクチャーまでもが動画リンク付きで載っている。レンゾ・ピアノ(<http://www.renzopiano.it>)は、プロジェクトが所在地や建物種別で検索できるようにしており、写真だけでなく図面類も充実している。日本でも、隈研吾(右上:<http://kkaa.co.jp>)は、プロジェクトの所在地をGoogle Mapsにリンクさせたり、WEBならではの仕掛けを持たせている。有名建築家の中には、Twitterを用いて日々情報を発信している人たちもいる。藤村龍至(@ryuji_fujimura)、西沢大良(@tairanishizawa)、青木淳(@junaoki22)、

建築史家の五十嵐太郎(@taroigarashi)のほか、専任・非常勤の先生たちも毎日つぶやいている。建築メディアでは、architecturephoto(@archphoto)がおすすめ。

建築雑誌だって買わなくても、dezeen magazine(<http://www.dezeen.com>)を見ていれば、世界中のデザインに関する情報を得ることができる。英語が十分にわからなくて、写真や図面を見ているだけでも楽しい。評論に興味がある人には、10+1 web site(<http://10plus1.jp>)がおすすめ。2010年まで紙媒体の雑誌だっただけあって、無料で読めるのが不思議なくらい。美術館に興味がある人は、その中の「Dialogue:美術館建築研究」(左下:<http://10plus1.jp/>



インターネットに関する名言集 (2)

「いま日本では、教育格差が話題になっている。しかしインターネットは万人が平等にアクセスできるものだ。ということは、勉強するかどうかは本人のやる気次第。勉強しようという「志」があるかどうかである。」(茂木健一郎・科学者)

monthly/serial/dialogue) と「現代美術館研究」(<http://10plus1.jp/monthly/serial/museum-research>) を読めば、かなりの知識を得ることができる。建築だけでなく、アートに興味がある人は **artscape** (右下: <http://artscape.jp>) や **ART iT** (<http://www.art-it.asia>) を要チェック。**COLOCAL** (<http://colocal.jp>) も、リノベーションをはじめとした独特の切り口で建築を紹介している。

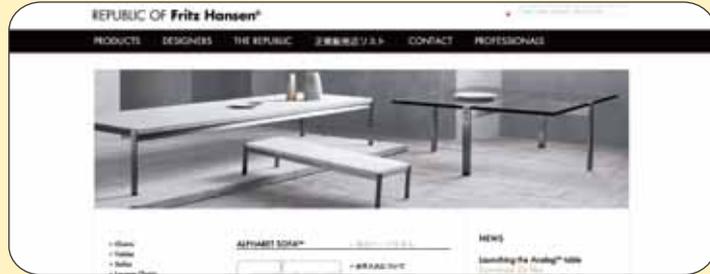
設計をするときにも、例えば図面にセブンチエアを描きたいと思ったら、メーカーである **Fritz Hansen** のサイトに行けば、正確な CAD データを手に入れることができる。(<http://www.fritzhanzen.com/jp/fritz-hansen/For-Professionals/3D-Tools>)。キッチンやトイレやお風呂だって、CAD データを提供するメーカーは数多くある (**LIXIL** や **TOTO** など)。 **Google Earth** や **Street View** だって、敷地調査からプレゼンテーションにまで、さまざまな役に立つ。

研究室でライブを見たときから、本当に時代は変わった。しかし、Ustream で配信されることで、ライブに行かなくなったかと言えば、そういうわけでもない。写真や図面は WEB サイトだけで十分かと言えば、解像度が低かったり、図面に縮尺がなかったりするため、結局は本や雑誌も欠かせない。図面だって、家具やトイレだけメーカーの CAD データを使ったリアルなものでも仕方がないので、自分の設計の密度を上げる必要があるし、最終的には紙に印刷したときの見えかたが重要になる。つまりは、ネットの世界が加わっただけで、リアルな世界が消えたわけではない。だから、インターネットという便利な道具を、この世界で使わなければいけない、と思うだけだ。 ■

設計に役立つサイト

Fritz Hansen

<http://www.fritzhanzen.com/jp>



1872年にデンマークで創業されたフリッツ・ハンセンは、アルネ・ヤコブセンやポール・ケアホルムなど、北欧を代表するデザイナーとのコラボレーションによる多くの名作家具を発表している。名作家具の CAD データに触れてみよう。

Google Earth

<https://www.google.co.jp/intl/ja/earth>



Google Earth は、Google 社が 2005 年から無料で配布しているバーチャル地球儀ソフト。世界中を飛び回れるにとどまらず、海中を表示できたり、航空写真は時代をさかのぼって表示もできる。さらに火星を表示できるモードも。どんな使い方があると便利かな？ 妄想しながら体験してみよう。

Street View

<https://www.google.co.jp/maps>



ストリートビューの凄さをまだ体験したことない人は、「ストリートビューアドベンチャー」と検索してみてほしい。ギザのピラミッド、タージマハル、エッフェル塔と、さまざまな世界の名所がバーチャルな眺めだけでなく、地理から歴史まで複合的に学べるコンテンツになっている。

駿建編集部 "mosaki" が オススメしたい WEBサイト



ここでは、建築にまつわるさまざまな

WEBサイトを取り上げました。

まだ、見たことのないサイトはあったかな？

是非、休み時間にでものぞいてみてください。

1 雑誌からウェブマガジンへ！ 今なお元気な建築読み物系メディア。

「10+1 web site」

(<http://10plus1.jp>)



建築メディアの一時を築いた雑誌『10+1』（テンプラスワン）が、ウェブマガジンになり継続されている。毎月あるテーマをもとに寄稿文やインタビューで構成されていて、読み応えがまさに雑誌レベル。またデータベースのページ (<http://db.10plus1.jp>) では、テンプラスワンが雑誌だった時代のほとんどの記事を検索して読むことができる。先生の名前を試しに入れてみると、寄稿した文章や著書、作品などが取り上げられているのがわかるかも。

監

4 個人ではじめたサイトが、 日本最強の建築情報メディアに！

「architecturephoto.net」

(<http://architecturephoto.net>)



「architecturephoto.net」は、「建築と社会の関係を視覚化し、建築を再発見するキッカケを提供する」をコンセプトにつくられている建築系情報メディア。国内、海外に関わらず、最新の情報が数時間単位で、日々更新され、今では、月間 100 万ビューを越すアクセス数を持つ、まさに日本最大の建築系情報サイト。最近では、就職情報にも力を入れている。日々チェックしておくことが、あなたの人生を左右するかも！？

監

5 数日時間が取れたなら、 ここで調べてアイデアコンペにチャレンジ！

「KENCHIKU」

(<http://kenchiku.co.jp/compe.html>)



「建報社」が提供する建築系情報サイト。ニュース、イベント、連載記事などがカテゴリ別に分かれ、日々更新されている。また、コンペのコーナーでは、さまざまなアイデアコンペ、実施コンペに関する情報がアップされている。こういうサイトは、定期的にチェックをして、機会をみてコンペにチャレンジしてみよう！ 中には、100 万円以上の賞金がでるアイデアコンペもありますよ。

監

2 今では全国にワークショップを展開、 新しいカタチの防災マップづくり。

「逃げ地図プロジェクト」

(<http://www.nigechizuproject.com>)



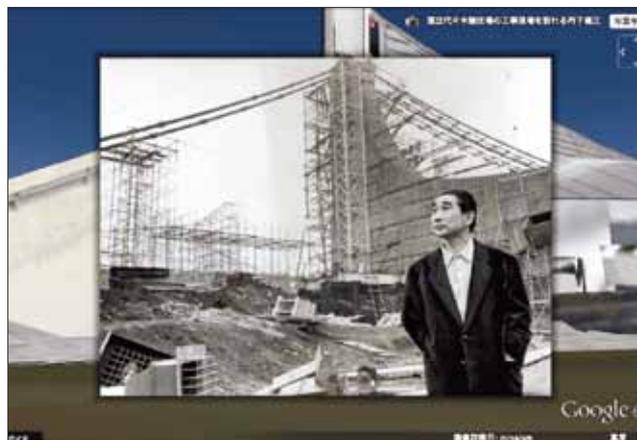
「逃げ地図」は、震災やそれに伴う津波が起きたときの避難ルートを作成しようというもの。非常勤講師の羽鳥達也先生をはじめとした日建設計ボランティア部の皆さんが、東日本大震災をきっかけにはじめたものだ。一般的な防災マップと異なり、地形や歩く速度までも地図に反映させ、実際に何分で避難場所へ辿り着けるかをパターンも提案するこの試みは、全国でワークショップを行うまでに発展。ひとつのプロジェクトを、どう発信するかという好例としても見る価値がある。

取

3 写真が時空を越えていき、 3Dマップ上に立ち現れるものとは!?

「東京五輪アーカイブ1964-2020」

(<http://1964.mapping.jp>)



「東京五輪アーカイブ1964-2020」は、首都大学東京 渡邊英徳研究室と朝日新聞社の共同研究によるもの。朝日新聞などが収蔵する1964年大会時代に撮影された4,000枚以上の記録写真をGoogle Earthの3次元地形や建物モデルに重ねて、当時の状況を実感を持って伝える。1964年と言えば、代々木体育館をはじめ、丹下健三の建物がいくつも竣工した年。丹下や建物の当時の貴重な写真が、地図上に時空を越えて現れる。鳥になった気分で、日本中を飛び回ってみてください。

取

6 日本人も続々登場、 UK発世界最強デザイン情報サイト!

「dezeen magazine」

(<http://www.dezeen.com>)



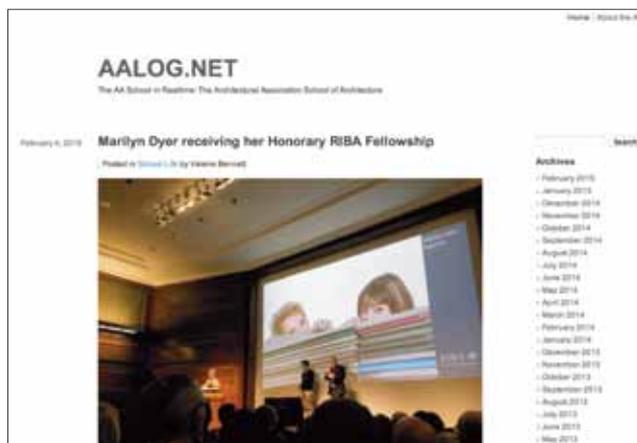
「dezeen magazine」は、ワールドワイドなデザインシーンを伝えるイギリス発のデザイン WEB マガジン。建築はもちろん、インテリアやグラフィックまで、さまざまなデザインに関する最先端の情報が日々更新されている。日本のメディアだけを見ていると、どうしても情報が偏ってしまう。今、世界はどのような潮流にあるかを知り続けるクセをつけておけば、社会に出てからも役に立つこと間違いなし!

取

7 海外の建築系大学は、 今どんな取り組みをしているのだろう?

「AALOG.NET」

(<http://aalog.net>)



建築を取り巻く世界は、日本国内はもちろんのこと、世界中で日々更新され続けています。今、自分と同じ境遇の世界中の人たちは、何に触れ、何を考え、どんなことをしているのか。そんなこともインターネットを活用すれば知ることができます。このWEBサイトは、ロンドンにある建築の学校、AA school 内のブログ「AALOG.NET」。ここでは学校内のありとあらゆる活動が、日々写真でアップされています。

取

インターネットの使い方



建物の耐震性能を実験的に評価可能な「分散ハイブリッド実験」の実用化。

text=田嶋和樹 准教授

大地震の際、建物はどのように応答するのか？ 実は、これは相当に難しい問題です。その原因は、建物の巨大さにあります。つまり、建物は巨大すぎて、実験的にその地震時の応答を直接確認することができないのです。そのため、これまでは部材実験や建物の縮小試験体を対象とした実験的アプローチとコンピュータを利用した数値シミュレーションを通じて、建物の地震時応答を推定するための技術の蓄積が進められてきました。

近年では、このような状況が大きく変わり始めており、実大規模の建物の地震応答を実験的に評価する試みが進められています。例えば、兵庫県に建設された

実大三次元震動破壊実験施設（E-ディフェンス）（写真1）では、一定規模の範囲内であれば、実物大の建物を実際に破壊させることが可能であり、これまでにさまざまな実大規模の実験が実施されています。しかし、実験に要する時間とコストの問題もあり、実大構造物に対する実験には限界があると言わざるを得ません。このような問題点を解決する手段として、「ハイブリッド実験」（あるいは「ハイブリッドシミュレーション」）の技術が注目されています。ハイブリッド実験とは、地震時の構造物の応答に支配的な構造要素については実験を行い、その他の部分については数値シミュレーションによって応答を求める手法です。最近は、

この手法を動的実験に拡張し、実現象に対応した時間軸で両者を結合する手法も開発されています（図1）。そして、これらの手法とインターネットが融合することにより、革新的な技術が生み出されつつあります。それが「分散ハイブリッド実験」です。

「分散ハイブリッド実験」は、もともと京都大学の研究者によって提案されたアイデアです（図2）。この手法では、世界各地の実験施設をインターネットで結んで並列実験を行い、コンピュータ上でそれらの結果を統合します。このアイデアに最新のIT技術を導入し、大規模に展開しているのがアメリカのNEESプロジェクトです。このプロジェクトでは、地震



写真1 E-ディフェンス (photo=099jduiao)

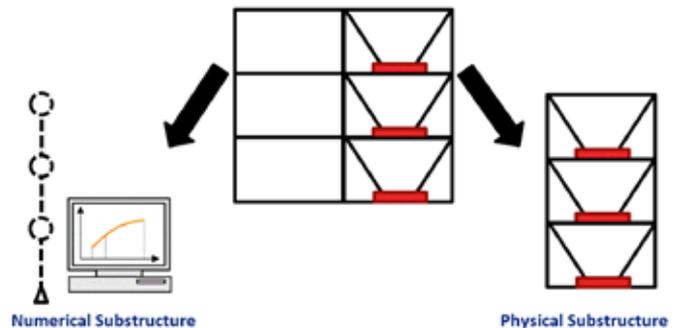


Figure 1. Real-time Hybrid Simulations of a Large-scale Steel Structure with Dampers

図1 ハイブリッド実験のイメージ

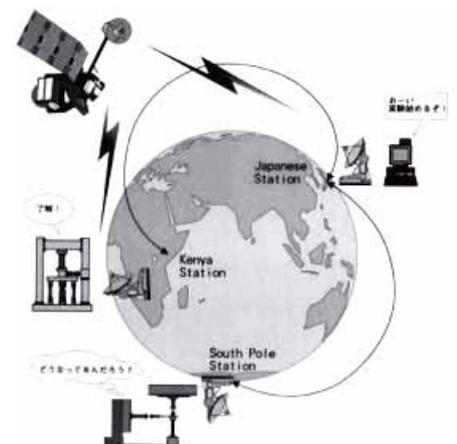
※NEEShubサイト (<https://nees.org/>) より引用

図2 分散ハイブリッド実験のイメージ

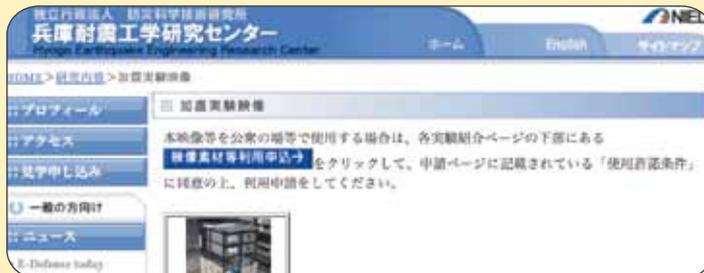
※高橋良和：分散ハイブリッド実験による大規模構造物の動的応答評価—アメリカNEESプロジェクトを中心に—, 日本地震工学会誌, No.10, pp.12-15, 2009.7より引用

先生の オススメ サイト

工学に関する実験、数値計算、理論、データベースなどをネットワーク化して、地理的に分散された資源の共有を目指しています。現在、全米の15大学に重点的に最先端の実験施設が整備されており、インターネットを介してこれらの施設は接続され、分散ハイブリッド実験の実証が行われています。2007年3月には、カリフォルニア大学バークレイ校と京都大学両校の実験施設を結んだ国際的な分散ハイブリッド地震応答実験が行われるなど、世界各地で分散ハイブリッド実験の研究が進められており、その実用化も近いと思われます。

兵庫県耐震工学研究センター > 加震実験映像

<http://www.bosai.go.jp/hyogo/research/movie/movie.html>



世界で唯一、実大規模の構造物の破壊過程を実験的に確認できる実験施設 E-ディフェンスのWEBサイト。数々の貴重な実験映像を見ることができる。木造、鋼構造、RC造および地盤に関する実験の様子や地震時の超高層建築物の室内の様子など、非常に興味深い映像が揃っている。

NEEShub

<https://nees.org/warehouse/welcome>



アメリカのNEESプロジェクトにおけるこれまでの実績を紹介するアーカイブ。興味のあるキーワードを入力して検索し、各プロジェクトに関する資料も入手可能。このような貴重なアーカイブサイトの存在は、インターネットの魅力のひとつ。

nees@berkeley

<http://nees.berkeley.edu/Projects>



アメリカのNEESプロジェクトに参加している大学のひとつ、カリフォルニア大学バークレイ校の活動内容が紹介されています。これまでに実施した多数のプロジェクト、特にハイブリッド実験を中心に、その内容を動画で紹介。実際にプロジェクトを実行している大学院生が説明をしています。

インターネットに関する名言 (3)

「マスメディアが一律に提供した情報ではなく、自分自身の手で、自分自身のために集取した情報を読めるというのが、インターネットの最大の魅力。」

(佐々木俊尚・ジャーナリスト)

インターネットの使い方



イメージの共有から都市の研究へ、 画像検索の新しい活用。

text=古澤大輔 助教

実際の建築設計業務の打合せでは、参考となるような画像を多数提示し、プロジェクトのイメージを関係者内で共有する作業を頻繁に行う。これは住宅や商業施設など、つくる建築の種類を問わない。施主の要望や施工者の意見、そして図面だけでは伝えきれない設計者の思いなどを、互いにすり合わせるための作業だ。従来は事前に準備した画像を打合せで提示し、意向にそぐわない場合は持ち帰り、修正は次回の打合せまでの宿題となっていた。しかしiPadなどのタブレット型端末が普及してからは、**グーグルの画像検索**を活用することで、その場でイメージを探っていくことができるようになった。関係各者が思い抱いている抽象的な要求から抽出したキーワードを検索窓に打ち込めば、プロジェクトが進むべき指標をタイムリーに獲得できる。

このように、イメージを具体化する上で画像検索という方法は大変便利であるが、これを都市的なスケールに拡張してみることも可能である。例えば、今私の研究室では、**現在の東京郊外をさまざまな面から再定義するプロジェクト**を、首都大学東京・明治大学と共同で取り組んでいて、私が担当するパートでは、グーグル画像検索の結果から郊外都市の特徴をあぶり出そうと試みている。学生たちに、自分が良く使う都市機能の名称（カフェとか美容室とか）と、都市名（鉄道駅名）を検索窓に併記してもらい、表れた画像一覧の傾向を都市ごとに記録してもらっている。そして、機能は同じだけどイメージが全く異なる隣り合う都市の分布を調べ、都心と郊外の境界がどのように存在しているのかを考察している。

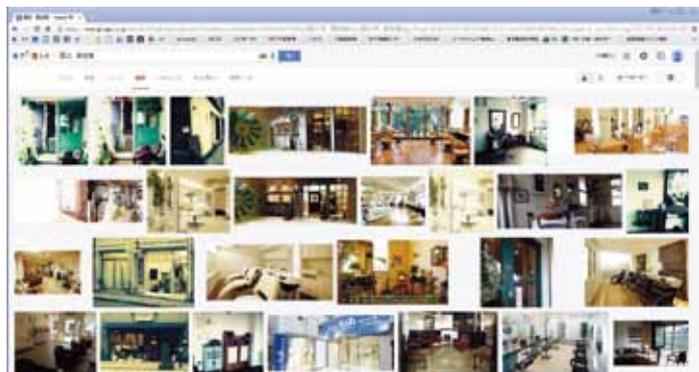
🔍 検索履歴から見えてくる自分の興味

インターネット環境が充実してから私たちの生活は本当に大きく変わった。朝、通勤電車に乗りながらツイッターやフェイスブックなどのSNS、あるいはビジネス情報サイトなどで今話題の記事をチェックして、そこで紹介されている書籍などをアマゾンで注文し、昼過ぎに自分の仕事場に本が届く、なんてことは何も珍しいことではない。

学生諸君にはSNSなどを活用して是非タイムリーな記事に触れてほしいと思う。そして、単に閲覧するだけでなく、気になったワードを積極的にグーグル検索し、自分が過去にどのようなワードを検索してきたのかを定期的に振り返ってみてほしい。以下のサイトで**自分の検索履歴**が閲覧できる。[\(https://history.google.com/history/\)](https://history.google.com/history/)

WEBサイトやイメージだけでなく、ニュース、地図および検索している時間帯の傾向を振り返ることができ、自分の興味のアンテナがどこにあるのか、そしてそもそも自分はどのような生活を送っているのかを客観的にとらえることができる。

情報が大量にあふれるこの時代においては、自分がどのような情報に日々接触しているのかを、まず情報として受け取る必要があるように思う。



「国立」「美容室」で、グーグル画像検索をした結果。



「国分寺」「美容室」で、グーグル画像検索をした結果。

インターネットの使い方



建築情報処理の課題が、 私を解析系の研究へと導いた。

text=星和磨 短大助教

大学4年の夏、研究室で実験データを整理していたときだった。ちょっとマニアックな同級生の丸山君が「BSDとかLinuxって知っているか？ Mac OSもそろそろ飽きただろ？ おまえのPowerMacにMkLinuxってOSを入れると、お手軽Unix環境が作れるんだぜ」と話しかけてきた。なんとも聞き慣れない単語が並ぶこの一言が、私の人生を大きく変えたのである。

大学2年の夏休みに1年半のバイトで貯めた約50万円をバーンとはたいて買った私のMacintoshは、CAD、ワープロ、表計算などをごく普通に使うごく普通のマシンだった。しかし、外付HDDにMkLinuxをインストールしたその日から、私のマシンはLinuxマシンにもなるハイブリッド仕様になったのだ。それからというもの、私は興味のおもむくままLinuxの管理本を何冊も買い漁った。TCP/IP、Apache、Sendmail、

Postfix、BINDなど、とても建築とは関係ない世界だが、自分のマシンを操作しながら使いこなしていくのが楽しかった。

それでは、これらを使った研究や仕事内容の一部を紹介していこう。

大学院生時代、私は一時期、自宅のMacからTelnet（現在は暗号化されたSSH）を使って、音響シミュレーションのプログラムが入っている駿河台の研究室のLinuxマシンを遠隔操作していた。大学に行かない日々があまりに続いたので、「星はちゃんとやっているのか？」と呼び出されたことを今でも覚えている。

就職先では、会社のWEBとメールサーバの立ち上げを命じられた。また現場では、某ブラネタリウム製のSun OSマシンの不安定な挙動を修正する業務を担当した。この時は、仕事だけに失敗できないというプレッシャーもあったが、うまく動いたときの嬉しさも学生時代とはひと味違った。

大学に戻り、解析系の研究に従事するようになると、同分野の研究者と共同で作業をすることが多くなった。二人から三人で書く原稿やプログラムであれば、それぞれが作業した後に、誰かが合わせればよいのだが、それ以上の人数になるとそうもいかない。そこで利用するのが、SubversionやGitなどのバージョン管理システムである。これらは、書類に誰がいつ編集したかをひもづけしておくだけでなく、編集内容をチェックして、コンフリクトを極力避けることができるシステムである。このようにして作った原稿は書籍として出版されるほか、まとめたプログラムは、WEBを介して広く公開されている。CMSを使ってホームページを作っているほか、Gitを使ってソフトウェアを配布している。その他、日本建築学会のWGでは、PHPとMySQLを使って、音響関係の発表梗概を検索できる“建音検索”を公開している。

みなさんが持っているかもしれないMacのOSは、OS X (ver. 10.0)以降、BSD Unixがベースになっている。私は、Macportsを使ってUnix由来のソフトウェアを適宜インストール、これらを利用しながら研究している。

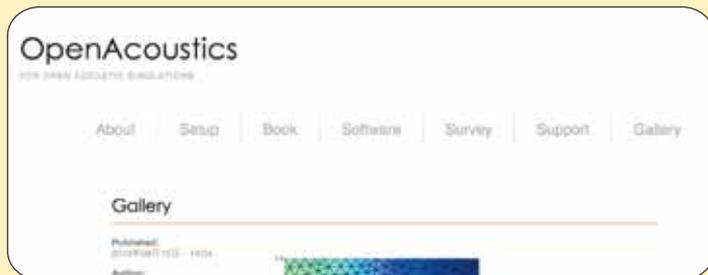
最後に一言。私が大学生のときに、2年生前期に設置されていた建築情報処理の課題を紹介しよう。プログラミングの課題で作ったワイヤーフレームの図とコンセプトを、ホームページの形式にして提出、その際HTMLは手書きという、いま考えれば結構ヘビーなもので、前定期試験終了後も船橋校舎に通った。今にして思えば、この課題がこの世界へ私をいざなう大きな一歩になったのかもしれない。

■

先生のオススメサイト

OpenAcoustics

<http://www.openacoustics.org>



研究グループで作った波動音響解析プログラムをオープンソースとして公開しているWEBサイトです。

インターネットの使い方



建築学科 コンピュータ演算室 利用のススメ。

text=宇於崎勝也 准教授、佐藤誠二



今や全世界をつないでいるコンピュータ・ネットワーク (Internet) に皆さんはどのような端末でつながっていますか。スマートフォンやタブレットでしょうか、パーソナルコンピュータでしょうか、あるいは家庭用ゲーム機でしょうか。さまざまな端末がネットワーク化され、制御可能となっています。このままいくと映画「ターミネーター」に登場した「人工知能スカイネット」がロボットを使って、地球上を支配しようとする世界が現実になるかも……と不安になったりしませんか。

さておき、建築学科では皆さんの学修や活動の支援を行うために「**コンピュータ演習室**」を設置しています。これは、他の学科では見られないサービスです。月曜日から金曜日の11時から19時まで（繁忙期に時間延長あり、休暇中に時間短縮あり）、5号館3階の演習室は建築学科・建築学専攻・不動産科学専攻の学生に開放され**無料で利用が可能**です。

使用できる機器は表1に示すとおりで、Windows 端末 25 台と Macintosh 端末 3 台を使って作業をしたり、ネットワークを介してさまざまな情報にアクセスできます。もちろんノートパソコンやタブレットを持ち込んだ作業も可能です。

ところでまだ「電算室」と呼んでいる人はいませんか。電算とは「電子計算機」のこと。昔はプログラムに沿って計算する装置でした。今日ではコンピュータは単に計算をする装置ではなく、ネットワークを介した世界への「扉」になっています。コンピュータも建築学科コンピュータ演習室も有効に利用しましょう。 罫

入室方法と機器・アプリケーション一覧

電車の改札口と同じように、学生証のタッチにより入室と退室を管理していますので、学生証を持って来てください。まず、来室して使用ルールを覚えましょう。

表1：コンピュータ演習室の機器

機器	種類と台数	
Windows 端末	25 台	使用できる主なアプリケーションは表2のとおり
Macintosh 端末	3 台	
プリンタ	インクジェットプリンタ	13 台
	モノクロレーザープリンタ	2 台
	カラーレーザープリンタ	2 台
	大型インクジェットプリンタ	3 台
スキャナ	A 4 サイズ対応	2 台
	A 3 サイズ対応	3 台
	A 0 サイズ対応	1 台

表2 使用できる主なアプリケーション

Windows 端末
Microsoft Office 2010 (Word/Excel/PowerPoint)
VectorWorks2011
Adobe CS5 (Illustrator/Photoshop/InDesign)*
JW_CAD

Macintosh 端末
Microsoft Office 2008 (Word/Excel/PowerPoint)
VectorWorks2011
Adobe CS4 (Illustrator/Photoshop/InDesign)*

*Adobe Creative Cloud に更新予定

■管理者の紹介

○杉野 祥呼 (すぎのしょうこ)

管理者として常駐しています。室内のコンピュータや周辺機器の利用方法、ソフトウェアの使い方など、基本的なことから、画像やグラフの取り込みなど、わからないことがあれば気軽に質問してください。

○佐藤 誠二 (さなぎせいじ)

課題提出期間などの繁忙期の応援で管理者として演習室にきています。演習室管理以外に建築学科のメールサーバ/研究室ホームページサーバなどの運用管理も行っているSEが専門職です。

1 | 建築家の小川博央さん、菅原大輔さん、鍋島千恵さんを審査員に迎えた 「第6回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション」開催 「人間時間空間の家／江崎桃子さん(M1)」が最優秀賞を受賞！

text = 古澤大輔 助教

日本大学各学部、大学院の在学生を対象とする設計競技「第6回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション」の公開審査が、11月22日にCSTホールにて開催された。今回は、最近活躍が目されている若手建築家の小川博央氏（2000年生産工学研究科修了）、菅原大輔氏（2000年理工学部卒）、鍋島千恵氏（1998年生産工学部卒）を審査員に迎えた。

公開審査会に先立って行われた7月16日の公開レクチャーの中で、「間（あいだ）の家」という今回のコンペの課題が3名の審査員により出題された。人間・時間・空間それぞれの間合いである「間」という日本特有の概念にフォーカスされた今回のテーマの意図がレクチャーの中で述べられ、発見的な「間」にあふれた新しいライフスタイルを想起させ

る住宅を提案して欲しいと、会場に集まった学生たちに向け期待が寄せられた。

1次審査を経て公開2次審査での白熱した議論の末、最優秀賞に「人間時間空間の家／江崎桃子（M1／佐藤光彦研）」が選ばれた。また各審査員賞として、小川博央賞に「間の開閉／島崎翔（生産工M1）」、菅原大輔賞に「いへの溝のいえ／宮本悠平（M1／空間構造デザイン研）」・岩井都夢（M1／山崎研）」、鍋島千恵賞に「街と孤人の間で／山川大喜（理工海建M1）」・滝村菜香（同4年）・斉藤賢司（同3年）」が選出され、佳作には、石川大二郎（3年）、稲葉来美（3年）、遠洞躍斗（理工海建M1）・涌井匠（同M2）・山影悠時（同4年）、斎藤佑樹（4年／佐藤光彦研）、宮本悠平（M1／空間構造デザイン研）・岩井都夢（M1／

山崎研）、森田秀一（4年）、吉村凌（3年）が選出された。

毎年建築界で活躍されている建築家を審査員に招いて開催している本コンペティションだが、今回の応募総数は各学部・学科合わせて37点であった。昨年度より応募点数が若干増加はしたが、日本大学に在籍している学生数からみればまだまだ十分な数だとは言えないだろう。第一線で活躍する建築家が出題する課題に取り組むことは、建築や都市に対する理解を深める上で、大変有意義なものであることは疑う余地がない。学生諸君には、各自の腕を磨く場として、次年度以降の本コンペティションを積極的に活用してもらいたいと思う。



上：公開レクチャー風景／各審査員のレクチャーの後、コンペテーマの出題が行われた。 左下：1次審査風景／1次審査は非公開で行われ、2時間を超える熱い議論の末、11組の1次審査通過者が出た。 右下：公開2次審査風景／1次審査通過者によるプレゼンテーション、審査員同士の公開議論の末、最優秀賞1点、審査員賞3点、佳作7点が選ばれた。

2 | 毎月開催、誰でも参加できるレクチャーシリーズ 「オウケンカフェ」レポート

理工建築にとどまらず、日大建築系すべての卒業生による会「日大桜門建築会」、略して「桜建会」。その桜建会が企画してゲストを招くレクチャーシリーズ「オウケンカフェ」が2013年7月から月に一度のペースで開催されている。卒業生はもちろんのこと、現役学生たち、また外部の誰もが参加可能だ。今回は、2014年10月から12月に行われた3つのレクチャーの先生と学生のレポートを紹介。2015年度のシリーズは、2015年4月からスタート。さまざまな世界の最前線で活躍する人の話から、学ぶことは多いはず。大学の授業だけでは伝えることのできない、さまざまな世界の話聞いてみよう！ 来年度の告知を楽しみにお待ちください。

* 毎回 19 時スタート。場所は、駿河台キャンパス5号館5階スライド室1。参加費は、桜門建築会会員・日本大学学生は無料、それ以外は1,000円（当日に入会すれば無料）。会場ではキャッシュオンにてドリンクを販売します。

vol.15 / 2014.10.29 WED.

ゲスト：坪倉正治

(医師／東京大学医科学研究所研究員／南相馬市立総合病院非常勤医)

| 渡辺莞治 (3年)

医 療界の話は直接聞くことがなかなかないため貴重であった。大災害を受けたとき、誰から助けるか、どのようなシステムで対応をするかなど、その場で最善の策を瞬時に判断しなければならない。生命が助かるか助からないかという微妙で曖昧なものを、白か黒かに分けなくてはいけない。何が・どれが正しいか分からない中で信じるものがあるとすれば、それは自分自身である。福島原発の問題は、とても繊細で安易に触れることができない。専門的知識がない私は、現状の整理すらできていない。3.11以後、さまざまな憶測や見解が飛び交っているが、正直どれ

が本当なのか分からない。曖昧で不確かな情報が多すぎて、問題すらはっきり見えてこない。膨大な情報に溢れた現代社会の中で、私たちは自分自身の考えで取捨選択していかなければならない。

坪倉さんのお話の中で希望が見えたことは、文化や歴史から、人の繋がりが、この先重要であるということである。3.11当時、私は福島にいた。福島の内外どちらから見ても思うことは、福島の中からもっと発信していかなければならないことだ。例えば、福島出身・在住の音楽家や詩人が集まって立ち上げた「プロジェクト FUKUSHIMA!」。このような福島の中からの活動がこれから先は重要である。福島から発信する中で、アートや演劇の影響力は

強い。これは福島だけでなく、地方でも同じである。この活動の骨格にあるのは、文化や歴史といった人の繋がりである。建築、アート、また医療界でも、人と人をどう繋げるか、どう繋がっていきけるかが、この先の課題だと考える。



vol.16 / 2014.11.26 WED.

ゲスト：アサダワタル

(日常編集家)

| 相馬衣里 (3年)

今 回のゲストは日常編集家のアサダワタルさんでした。日常編集とはある状況を一度整理した上で再構築し、提出する活動で、音楽活動や「住み開き」と称したアートプロジェクトを筆頭に、日常の中にそのコミュニティだけでは生まれることのない出会いであったり、状況、場を創る仕事をされているそうです。一見何を生きているかわかりづらいアサダさんの活動ですが、当の本人も「目的がはっきりしていない活動」と人によく言われるそうです。レクチャーでは、その活動の実

例をいくつか紹介していただきました。どの活動も行政や地域に密着した活動ばかりで、行政の動きや地域方針の変更でこれまでの活動が予定通り行うことができなかつたり、全てゼロになってしまうこともたびたびあるそうです。アサダさんは自身の活動を「社会派活動や町おこし活動ではないが、結果としてそういった活動に繋がることがある」とおっしゃっていました。それは目的をあえて確定させず、状況に応じた発想・自由度の高いやり方で物事を進めていくアサダさんだからこそできることだと思います。

私はまだ将来やりたいことがわからず、

好きなことやさまざまな興味の対象に手を触れてしまいます。今回のレクチャーを聞いて「好き」を突き詰めて生きる人は生き生きしているなと思いました。私もできることならアサダさんのように「好き」で成功したいです。



vol.17 / 2014.12.17 WED.

ゲスト：齋藤桂太
(アーティスト)

| 古澤大輔 (助教)

17 回目のオウケンカフェは渋谷(シブハウス)の齋藤桂太さんをお迎えし、お話しいただきました。僕自身勉強になりました。スライド枚数はたったの5枚程度。半分フリートークのような感じで、肩の力が抜けた雰囲気は印象的でした。レクチャーを聞いてこういう感情になったことはあまりないのですが、とにかく感動しました。

恥ずかしながら僕は渋谷のことをあまり詳しく知らなくて、テンション高くシェアハウスやってる人たち程度としか認識できていませんでした。だけど齋藤さんの話、そしてその後の居酒屋での議論はとても面白かったです。

齋藤さんは「家を借りることを「作品」だと言います。なぜなら他人同士が住むことで生まれるカオス的な状況＝「野蛮さ」を引き受けることが、お膳立てされ、漂白される力学が働いてしまう現代美術界への批評性を持ち得るからだ。自分がやっていることは作品なんかじゃない、と言い切ってしまう作家が見受けられる中、あえて作品だと言うことにこだわる真摯な姿勢はとても力強い。

「野蛮さに当事者として立ち会う」ことの重要性を述べられたわけですが、これは別の言い方をすれば「当事者性によるリアリティの採集」であって、例えばまちづく

りや地域活動を建築家やクリエイターが行っている状況に近い。しかし、圧倒的に面白いのはこれらを全て「演劇」だと言い切るところなのです。

つまり、入居者の死や妊娠といった他者同士の生活というどうしようもないリアリティを演劇という手続きでメタ化し、作品化への回路を担保しようとしている。当事者性／作家性の二面性による活動が、今後の作品とは何かを考える上で非常に重要になると思いました。

今の渋谷では入居者それぞれの特技を活かして、イベントやビジネスなどが勝手に立ち上がる状況になって来ていると言います。今後の運営については入居者 20 人くらいの単位で分家化していくとも言われていました。

少し深読みするようだけど、この分家方式の背後には、各小組織が独自の製品とマーケットを持つ有機的な関係という構造が見えてきます。これはドラッガーやハンディらが言うところの連邦型組織そのもの。

このような場当たりの活動にはアーキテクチャが無いと批判されがちですが、実はちがう。そして、極めつけは、そこに本人が住み続けることによる持続可能性。これも場当たりの活動は持続しないと批判されがちだけど、実は違います。

まとめると、当事者性によるリアリティの採集／演劇性によるメタ化／居住するこ

とによる継続性／連邦型組織によるアーキテクチャ化など、齋藤さんには、次の世代の作品性・作家性を考える上で非常に示唆的なキーワードをいただいたと思います。

しかし、下の世代が本当に充実してきているので、僕らの世代もボヤボヤしてられません。特にリノベーションなどでコミュニティ活動を行って地域を盛り上げる建築家達は相当意識的になったほうがいいと思います。自分自身に対する戒めでもありますが、当事者性によるリアリティの採集に酔ってしまっただけなものです。

リノベーションやコミュニティなどは、やったことに対するレスポンスが早いからテンションがあがって盲目的になりやすい。そして、アドレナリン障害になってしまった建築家は、自己批判的回路が欠如してしまっている。当事者性の他にメタ性、持続可能性、構造的性の4軸による評価が必要だと痛感したのでした。 ■



■受賞

・高安重一短大助教の設計した「日本そばん資料館」(下写真)が、「JCD デザインアワード 2014」(主催: JCD 日本商環境デザイン協会)(応募総数 473)で入選した。「日本そばん資料館」は 700 丁の貴重なそばんや算術の古書 1,500 冊などの展示・保存・研究・啓発を目的とし、設計コンペを経て全国珠算教育連盟の 1 階を改修して開館された。



・高田康史短大副手は、日本建築学会関東支部第 16 回提案競技「美しくまちをつくる、むらをつくる」建築・まちづくり提案の部にて、「栃木市に生まれたオーケストラモノ・コト・ヒトが奏でる時代の旋律一」を提案し、優秀賞を受賞した。

・所義登くん(M1/地盤基礎研)の論文「中空ねじりせん断によるセメント改良粘土の力学特性—セメント系固化材の種類の影響—」が、第 49 回地盤工学研究発表会において、「優秀論文発表者賞」を受賞した。

■講演

・吉野泰子短大教授は、2014 年 8 月 16 日～19 日、中国内モンゴル自治区通遼市で開催された、第 6 回日中韓女性科学者・技

術者リーダー会議に日本代表として出席し、砂漠化した土地の持続可能な復元と活用に関し、「A Survey on Actual Conditions of Residential Environment and the Renovation for A Bio-Village Around Western Region of China」と題し講演した。

■書籍

・岡田章教授、宮里直也准教授が執筆した『くわすぎる構造力学演習 II 図解法と変形編』(エクスナレッジ)が刊行された。本書は問題を解くことを通じて構造力学の楽しさを味わいながら、自然と理論が身に付くことを目的としており、『M・N・Q 編』に続く 2 冊目。本書は「図解法と変形」について学ぶ。

建築学科 | 2014年度海外研修旅行 | レポート

今年度も夏季休暇中に海外研修旅行が2コースに分かれて行われました。総勢 80 名の学生が参加しました。今回は、A コース、B コースそれぞれの参加学生によるレポートをお届けします。

ARCHITECTURAL
STUDY
TOUR



22日間、ヨーロッパ5カ国の近現代建築を巡る旅

フランス～イタリア～スイス～スペイン～ポルトガル～フランス



左：「ラ・トゥーレット修道院」の教会 右上：「サンミゲル市場」 右下：集合写真「グエル教会」屋上 @ パルセロナ

もう一度訪ねてみたいラ・トゥーレット修道院

Text = 須藤匠 (M1/ 古澤研)

今 回の海外研修旅行では近代から現代への建築の変遷をビルディングタイプごとに追いかけることができた。

主に教会である。教会は建築の最も初源的なビルディングタイプであるが、素材の発見、工法の発達により設計手法も様式から脱様式へと発展してきた。「ミラノ大聖堂」、「サグラダ・ファミリア」、「ロンシャンの教会」など、今まで写真や図面を通して触れてきたものをいざ目にしてみると、その理解をいっそう深めることができた。

特に「ラ・トゥーレット修道院」の教会は、今まで見てきた建築の中で最も美しい空間であるという確信が得られた。また、その空間に対して批評することができなかった（批評する必要があるのか？）と感じてしまった作品であった。「ラ・トゥーレット修道院」全体を通して、今まさに研究室のプロジェクトで直面していた問題をル・コルビュジエはまるで問題意識を持っていなかったかのように

納めていたり、実際宿泊することもでき、その禁欲的な空間を堪能することができた。ぜひもう一度訪ねてみたい建築である。

また、再生建築を多数巡る中で、日本と海外の再生建築に対する捉え方の違いに考えさせられた。日本では建築を再生することの要因には経済的な側面が大きい。しかし、海外では根本に建築は姿を変えても使われ続けていくものだという考えがある。再生建築に対してさまざまな手法を見ることができたが、まず日本では再生建築に対する意義とは何かを改めて考え、議論していく必要があると感じた。

最後に、大学院1年生で海外研修に参加できたことはとても大きいものであった。後輩の皆さんにも、4年生や大学院進学後に海外研修に参加してみることをお勧めしたい。自分の建築に対する考え方を改めて見直す絶好の機会になると断言したい。



上：「ラ・トゥーレット修道院」で宿泊した部屋 下：「ラ・トゥーレット修道院」の廊下

建築を言葉にすることの大切さ

Text = 太田みづき（3年）

今 回の海外研修でたくさんの建築を実際に見て体験し、中でも、設計の授業で参考にしてきた「ヴィトラハウス」や、純粋に空間に感動した「ラ・トゥーレット修道院」、自然光とレベル差が美術館の体験として新しかったオルセー美術館、高架鉄道という土木構造物を歩行者用プロムナードと店舗に再生させた「パスティエユ高架鉄道改修」などがとても印象に残っています。

また、ヨーロッパの街並みにもそれぞれ都市ごとに少しずつ違った特徴があって、とても新鮮でした。特に印象深かったのは、ヨーロッパの街にはみんなが集まって話したり、休憩したり、遊んだりできる広場や公園などのパブリックなスペースが多くあったことです。そこには、木や噴水などがあり、花壇にはさまざまな種類の花が咲いていて、それらがきちんと管理されていました。また向こうの人たちは、街中の階段などにも座り込んで話していたり、お昼を食べていたり、とても自由に過ごしていて、もともとはそんな使われ方をすることを想定していなかったはずだと思うけれど、それが街の人たちのコミュニケーションの場のひとつになっていて、とてもいいなと思いました。

そして、今までは再生建築について正直あまりよく知らなかったし、興味がなかったのですが、さまざまな手法で既存のものを保存させながら再生させている建築を見て、単純に新しくつくることよりも面白いと惹かれたし、これからの社会にとってとても重要で、求められてゆくものなのだと感じました。

それから、今回たくさんの建築を見て一番感じたことは、社会的なものである建築は、言葉にして説明することがやっぱりとても大切なことなのということです。純粋に建築空間に感動して、言葉はいらないんだと感じたこともあったけれど、やっぱり言葉にするということは必要で、そこが絵や彫刻などの芸術作品とは大きく違う部分なのだと実感しました。よく考えてみると当たり前のことなのかもしれないけれど、社会に建築は多かれ少なかれ影響を与えていて、建築も社会から影響を受けていて、その中で、言葉にして誰もが理解できるように説明ができることは、絶対的に必要なことなのではないかと再認識させられました。

最後に、この約3週間の旅は、私にとってとても貴重な体験となり、数えきれないほどの思い出ができました。そして、帰ってきた今一番思うことは、やっぱり建築が好きだということでした。この思いを忘れずにずっと持ち続けながら、後期以降も今まで以上にたくさんのことを吸収していきたいです。



上から：「ラ・トゥーレット修道院」、「ヴィトラハウス」、「パスティエユ高架鉄道改修」
左：「コルビュジエセンター前広場」



Aコース | 同行教員：重枝豊教授、古澤大輔助教 | 外部
研究員：神本豊秋（東京大学） | M1 / 須藤匠 | 4年 /
石田敬幸 | 3年 / 石川大二郎、稲葉来美、太田みづき、
大貫淳史、小川寛人、尾崎健、鎌田桜子、菊地謙太郎、
菊池毅、木崎あい、倉谷星美、古賀愛乃、下田麻穂、鈴
木崇史、鈴木友梨、瀧澤政孝、武田賀央、築野淳子、野
下啓太、萩原修太、久次桃加、廣野陽太、福井志麻、峯
村颯、宗形龍磨、本橋弘貴、横溝幸乃、渡邊樹哉 | 2年
/ 秋本百合、石澤遥、上田優麻、岡山卓矢、尾崎泰大、
櫻井達也、赤城侑真、望月美那、矢神千帆



ARCHITECTURAL
STUDY
TOUR



22日間、ヨーロッパ10カ国の美術館を巡る旅

デンマーク～オランダ～ドイツ～ルクセンブルク～スイス～
オーストリア～イタリア～ヴァチカン～イギリス～フランス



上段左から：「インゼル・ホンブロイヒ美術館」@ノイス、
ルクセンブルク、「カンピドリオ広場」@ローマ、「ルーヴル・
ランス」 左下：集合写真「ROLEX ラーニングセンター」@
ローザンヌ 右下：「アムステルダム国立美術館」エントラ
ンスロビー

アートと日常のくらしの関係を見た素敵な日々

Text = 小笠舞穂 (M1/ 佐藤慎也研)

デンマークからローマまで徐々に南下し英仏へと戻るBコースの研修は、とにかく美術館を回るもので、卒業設計から美術館を研究している私にとっては、写真や本で見たものがどんどん目の前に現れ、直に触れる素敵な22日間でした。

それはもう美術館や作品に酔ってしまうほどのスケジュールだったのですが、平日の昼間なのにとにかくどの美術館も混み合っている様子は、とても普段使いで日常的な空気が漂っているようで、日本とは違うその様子がその特別すぎる日程をカバーしてくれたようにも思えます。そしてその感覚こそ、私が今回の研修で一番印象的だったことでもあります。

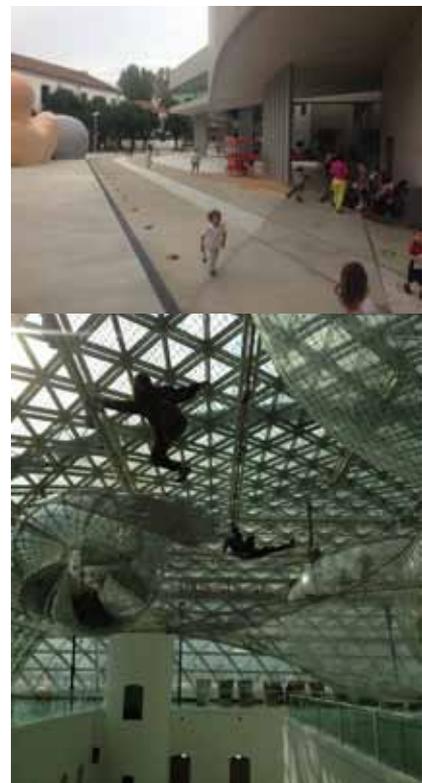
例えば、「ルイジアナ美術館」は開館前に多くの人々が並んでいましたが、開館と同時にずらずらとほとんどが館内の一番億のカフェへ流れ、朝ご飯をのんびり食べている様子。「アムステルダム市立美術館」の増設されたバスタブのようなボリュームの下で若者が踊っている風景。ザハが設計した「MAXXI」のボリュームの下で遊んでいる子供達や、「ポンピドゥーセンター」の前の広場で昼寝をする人々は美術館と切り離されてはいない、人々の生活の中にある美術館の姿で、とても理想的なシーンがたくさんありました。

もう一つ記憶に残っているのは、大胆なり

ノベーションを施された美術館です。歴史を感じるメインボリュームに非常に近代的なデザインの増築を設計/新設しているというパターンです。リニューアルオープンしたばかりだった「アムステルダム国立美術館」のロビーホールには、中庭だった広場に現代的なガラスの屋根がかかり、大きなシャンデリアのようなモニュメントがぶら下がっているのですが、その空間と周囲を取り囲むレンガ造の古き良きファサードはなぜか共存している、その空間には多くの人々がカフェで休む姿や、見学をする姿を見ることが出来ます。他にも先ほど挙げた「アムステルダム市立美術館」やデュッセルドルフの「K21美術館」、H&dMの「キューパーズミュージーレ」、ズントーの「聖コロンバ」、「パレドトーキョー」など、日本ではあまり見かけないような建築の保存方法が、ヨーロッパの街にはありふれていました。そのデザインは歴史期的建造物とモダンな建築が当たり前のように混在する風景の中で、それらをつなぎ止めるような存在として非常にシンボリックであると同時に、街の中で人々を繋ぐ建築として機能していた様子が印象的でした。

それぞれの国や地域のアートと日常のくらしの関係を垣間見ることができた22日間でした。美術作品やおいしいごはんも行かないと

体験できないので、時間があるときに行くことは本当に良いことだと思います。学部の時にも行きたかった。



上：「国立21世紀美術館(MAXXI)」@ローマ 下：「K21市立美術館」@デュッセルドルフ

自分たちの感性が豊かに成長した3週間の旅

Text = 井上真由美（2年）+大場麻莉子（2年）

こんにちわ。私たちは2年の夏にこの研修旅行に参加しました。3週間で10カ国も行ったので、基本的に1、2泊で移動する忙しい日々でした。パンとチーズとハムを鞆に詰め込んで、2、3個の美術館を巡る毎日。22日間で40館近い美術館を見ました。日本でも興味があり、美術館に行く機会は多かったのですが、見るもの全て、スケール感といい、採光の仕方といい、違いがあって、刺激がいっぱいでした。

特に私たちが気に入った美術館は、「ルイジアナ美術館」です。この美術館は、邸宅だったものに増築に増築を重ねてつくられています。美しいランドスケープと一体となった控えめな建築は、作品を見るための場所を丁寧につくっている印象でした。周囲のランドスケープを見るための大きな開口部を持った展示室が特徴です。特別展示室では、とんでもない企画展に遭遇しました。私たちが行く前日に始まったばかりの最新のインスタレーションは、展示室内に小石を敷き詰め、小川が流れているランドスケープをつくり出していました（オラファー・エリアソン「Riverbed」）。展示室内に入った途端に言葉を失いました。本当にすごかったです。

もうひとつは、「ルーヴル・ランス」です。SANAA（妹島和世+西沢立衛）の設計で、壁に歴史をたどる年号軸があり、その順番に作品がランダムに展示されていました。壁は鏡面仕上げになっていて、そこに反射する作品は印象的でした。また、動線がなく、ランドスケープ的な美術館は初めてで、とても驚きました。

美術館はたくさん見ましたが、それ以外にもいろいろところを見たり、散歩したりしました。ルクセンブルクでは、先生方と溪谷を歩き、遺跡を見ながら、暗い夜に地図を持たずに獣道を通りました。パーゼルでは、夜に街を歩いて、屋外劇場に遭遇したり。街巡りもたくさん楽しみました。ホテルでは、何日かおきにまとめて洋服を洗濯。乾かないものはドライヤーで乾かすこともありました。ある日洋服にドライヤーをかけていたら、まさかの火災報知器を鳴らす事件に……。

3週間は充実した日々で、あっという間でした。普段、写真や話で聞く建築を、実際に目でみる体験は大きいものでした。この研修旅行に行く前と後では、建築の見方が変化し、感性が豊かになった気がします。この研修旅行に参加し、建築に触れることは、人生の中でも大きな経験となりました。



上：集合写真「サヴォア邸」にて 中左：「ルイジアナ美術館」で行われていた企画展 中右：「ルーヴル・ランス」常設展示室
左下：「ルイジアナ美術館」のレストランにて 右下：ルクセンブルクでの散歩

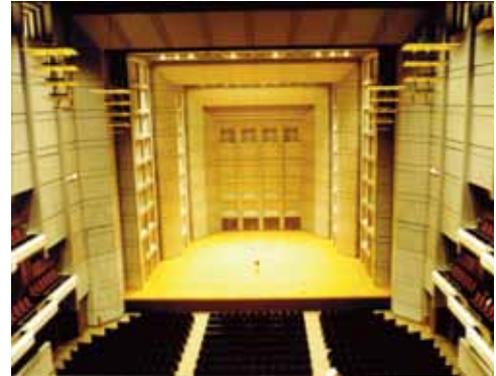
Bコース | 研究同行教員：佐藤慎也准教授 橋本修准教授 | M2 / 落合俊太、金子祐弓、中島奈津実、中田有紀、矢島慧、吉沢彬成 | M1 / 小笠舞穂、緒方彩乃 | 3年 / 朝賀玲奈、飯塚美月、池田裕光、石井晃、石井利宜、今村文悟、江澤暢一、大川碧望、大木裕登、笠原隆、風間証聖、鎌田七海、神尾健太、小林拓生、齋藤楓門、齋藤史江、佐藤奈都子、下池由莉子、下村耀子、末次華奈、鈴木美結、高山宗平、竹田佳歩、寺山悠貴、富澤昂紀、富山稀恵、中橋友弘、町山佳穂、吉村凌、柳スルキ | 2年 / 井上真由美、大場麻莉子

音との出会い、感覚的邂逅

text= 橋本修 准教授

私 が学部4年生で卒研研究室を決める時期に、その後の人生の分岐点ともなる研究テーマとの出会いがあった。「音からみた建築空間のデザイン。音楽と建築が融合する音楽ホールの音響設計！」当時音楽とギターに執心していた自分は心を強く揺さぶられ、その興奮は新たな建築への好奇心を掻き立てる想いと化して深く心に刻まれた。この直観による選択が正しき解であると信じ、建築音響の研究をしたい！と決心したことを覚えている。

学 部生さらに大学院生として恩師の研究室に所属していた頃、研究室は渋谷のオーチャードホール(右写真)など音楽ホールの音響実務に多く関わっていた。コンピュータによる音響シミュレーションや、縮尺模型による音響実験、竣工後の音響測定など、音響設計から完成までの流れを勉強できたことは幸せであった。このように書くと好環境に恵まれ毎日がバラ色であったかのようにあるが、いざ研究室に入って研究と向き合ってみると、難解な音響工学の専門知識の理解や自分の研究テーマの進捗に悶々と悩んでいたことを思い出す。そんな中、好きな演奏家のコンサートに行き音楽の感動に浸りながら、同じ演奏者であってもホールが違うとなぜ音が違うのか？といった疑問や、レコード試聴では得られない立体的な音響体感の素晴らしさに気づくようになっていた。好奇心は新たな発見のための貴重なリソースである。このように、自分の愛する音との縁にこだわって大学で勉強できたこと、そして何より音への共感や音響実務を通して先生方や先輩から熱きご指導を頂いたことが、今の自分にとって大きな財産となっている。修士修了後、ゼネコンの設備部門に就職したものの、再びこの大学に戻って今の道を歩むことになったのも、この縁がある故に他ならない。建築と音との関わりは、ホールなどの音楽パフォーマンス空間のみならず、日常性においては音声による情報伝達も重要であり、学校などの教育施設や駅などの公共空間における音響評価や拡声スピーカによる制御法についても研究を行っている。



現 在は、音の分野のみならず、光の分野の研究テーマにも取り組んでいる。今号の駿建の記事にある夏の海外研修旅行(Bコース)では、ヨーロッパの現代美術館のフルコースを堪能し、さまざまな自然光導入の技法を見ることができた、と同時に自然光のもとで美術鑑賞をする心地よさに魅せられた。室内への自然光の透光コントロールが見事なオランジュリー美術館・モネ「睡蓮」の間やバイエラー財団美術館、また、特徴的な光空間の創出としてプレゲンツ美術館(左写真)やルーヴル・ランスのアイデアは斬新であった。前述した音楽ホールと美術館の空間に共通することは、いずれも人が鑑賞することによって空間の本質が成立するという点である。建築が単なる空間としての存在ではなく、人の感覚を通じた「ライヴな体感」としての評価が求められる点において、音や光の環境要素と建築空

間との関係性を求める研究テーマは非常に興味深い。右の写真は、海外研修旅行中に訪れたロイヤルアルバートホール The Proms でのワンショット。現地でこの公演を知り、当日券を買うために2時間半並んで、1階平土間の立ち見エリアで世界最高峰のサイモン・ラトル/ベルリン・フィルの演奏を聴く機会を得た。たった5ポンドで……。旅先での出会いが生んだライヴな感動のひと時であった。

音 「光」という感覚のアンテナを介して建築と向き合いながら建築空間の魅力を探りたい！空間を創造したい！と思う気持ちは今も変わらない。常に好奇心をもち続けければ、きっと良い出会いや発見がある……と信じている。



Contents

- 02 **[SPECIAL FEATURE]**
インターネットの使い方
- 13 **[NEWS & TOPICS]**
第6回 日本大学校門建築会 学生設計コンペティション
オウケンカフェレポート
受賞・論文掲載
- 18 **[Report]**
2014年度海外研修旅行レポート
- 22 **[Architecture & Me]**
vol.78 音との出会い、感覚的邂逅 橋本修 准教授
- 24 **[EVENT REVIEW]**
mosakiのイベント巡礼 vol.11
「ジャパン・アーキテクツ 1945-2010」

SHUNKEN

2015 Jan. Vol.42 No.4

「駿建」

発行日：2015年1月31日

発行人：中田善久

編集委員：佐藤慎也・田嶋和樹・橋本修・長岡篤・古澤大輔・中田弾・山崎誠子・廣石秀造

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：<http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで<shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>

event review

mosakiのイベント巡礼 vol.11

ジャパン・アーキテツ1945-2010

会場：金沢21世紀美術館
2014年11月1日(土)～2015年3月15日(日)

ポンピドゥー副館長から見た 日本建築クロニクル

◆ 今回の展覧会は、フランスはパリにあるポンピドゥーセンターの中にある美術館の副館長であり、ロンドンのパトリック建築学校の学長でもあるフランス人、フレデリック・ミゲルーさんがキュレーター。日本の建築資料を多く収蔵しているポンピドゥーのコレクションも大量に展示されているよ。

♥ 建築資料って、図面とか？

◆ そうそう。模型や図面といったものは、鑑賞されるような美術作品ではないけれど、資料としてとても意味のあるものだからね。海外の美術館では、日本の建築も含めて、重要なものをちゃんとコレクションしているんだって。

♥ そっか、収蔵とか管理って場所も手間もかかるし、それだけで結構な出費になるもんね。いつまでも設計事務所が大事にとっておいてくれると思ったら大間違い、ヘタすると邪魔モノ扱いになっちゃうもんね。

◆ このままいくと将来、今回の展覧会みたいに、美術館で日本の近現代建築の歴史を振り返る、という企画になったとき、海外のコレクションを拝借することに頼りきりになっ

てしまうかも知れない。国内で自国の建築資料を大事に持つということの重大さを、改めて考えさせられるね。

♥ そうだね。そのくらいこの展覧会、見応えあるもんね。中には建物の欠片のようなものまであったけど、でも時系列に辿って見ていくことで、ちゃんと資料としての価値が表れるようになる。

◆ とにかく全部「本物」なのがアツい！

♥ そうそう！ 模型も再現じゃなくて当時のものだから、昔のは木材でつくってあるし。この展示の中では、コンピュータなんてない時代の方が長いから、図面もスケッチも、とにかく手書きで、その辺の変化も面白いし、息づかいまで伝わってきそうな臨場感があった。高松伸さんの鉛筆画とか、紙が燃れるくらい芯を擦りつけているのが見て取れて、もうたまらない迫力。

◆ 今回は日本建築の中でも、第二次世界大戦が終わった1945年からの65年間で、大きな役割を果たした日本の建築家たちによる150超のプロジェクトから、戦後日本建築史を綴る、という企画だね。改めて、日本の戦後建築というものは、めくるめく変貌を遂げていることが、如実にわかる。これじゃ、建築って何？っていう、ただでさえ答えのない問いも、ますます落ち着く暇がないわけだ。

♥ この65年を6分割して、色分けしているのが面白いね。終戦直後は黒で、明るいグレーになったり、カラフルになったり。あくまでミゲルーさんの視点からっていうところが、自由でいいと思った。

◆ そう。歴史の読み解きって本当は、いろんな視点があるはずなんだよね。一風変わった分析ともとれるけれど、僕はそこが本展の素晴らしいところだと思う。



Recommend | 2014年1月 - 3月

【1】「3.11以後の建築」| 金沢21世紀美術館 |

会期：2014年11月01日(土)～2015年05月10日(日)

東日本大震災は、建築家と建築界にどのような意識の変化をもたらしたのだろうか。3.11以後、人と人との繋がりがや地域の人との関係、環境やエネルギーとの関係など、これまで以上に、さまざまなことが設計に求められるようになってきたと言われる。これからの日本において、建築家がどのような役割を果たし、どのような未来を描こうとするのかを25組の建築家の取り組みを通して伝える。

【2】「TANGE BY TANGE 1949-1959 / 丹下健三が見た丹下健三」| TOTOギャラリー・間 |

会期：2015年01月23日(金)～2015年03月28日(土)

戦後を代表する建築家、丹下健三の没後10年の節目に開催される展覧会。処女作「広島平和会館原爆記念陳列館」(1953)から初期代表作のひとつ「香川県庁舎」(1958)完成までの10年間(1949～59年)に焦点を当て、丹下自らが撮影した35mmフィルムのコンタクトシートを通してその初期像を紹介。若き丹下がどのように建築と対峙したのか、建築家の思索と葛藤の痕跡を生々しく伝える。

【3】「単位展—あれくらいそれくらいどれくらい?」| 21_21 DESIGN SIGHT |

会期：2015年2月20日(金)～2015年5月31日(日)

単位をテーマとした展覧会。単位で遊ぶと世界は楽しくなる。単位を知るとデザインはもっと面白くなる。単位というフィルターを通して、私たちが普段何気なく過ごしている日常の見方を変え、新たな気づきと創造性をもたらす展覧会。大西麻貴+百田有希 / o+h、大野友資、寺田尚樹(テラダモケイ)などの建築家も参加する。

[編集後記]

今号の特集は、インターネットの使い方と題して、何人かの先生方に、それぞれの立場から、どのようにインターネットに出会い、どのように活用していますか?という質問をぶつけながら、文章を寄稿していただきました。全ての先生方、そして学生の皆さんにも書いていただきたかったというのが、正直なところでした。それほどに、インターネットというものは、実はそれぞれに利用・活用の仕方が異なり、またそこから得ているものも違うと思ったからです。さて、これまでインターネットはコンピュータ同士を結びつけるネットワークでしたが、これからは人間の脳と脳とを直接結びつけることが可能になると実験が進められているそうです。そして、デバイスとサービスは、まだまだ進化していきます。未来のインターネットと私たちの関係は、建築の世界や私たちの暮らしを、どのように変えていくのでしょうか。(大西正紀+田中元子/mosaki)